

## “是…的” 構文の多義性と「的」の本質

郭, 楊

<https://hdl.handle.net/2324/2235997>

---

出版情報：九州大学, 2018, 博士（文学）, 課程博士  
バージョン：  
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（2）

氏名	郭 楊				
論文名	“是…的”構文の多義性と「的」の本質				
論文調査委員	主査	九州大学	教授	上山	あゆみ
	副査	九州大学	教授	久保	智之
	副査	九州大学	准教授	下地	理則
	副査	九州大学	講師	太田	真理
	副査	九州大学	教授	高山	倫明

### 論文審査の結果の要旨

従来、中国語の研究においては、「的」は（修飾表現を主名詞に連結する場合を除けば）名詞化辞であると考えられてきた。本論文が特に注目するのは、「的」がいわゆる判断詞「是」と共起する“是…的”構文と呼ばれる場合についてである。先行研究の主なものはたいてい、“是…的”構文という単一の構文があると仮定し、その「的」を名詞化辞としての機能に結びつけて説明しているという。これに対して、本論文は、「是」と「的」が共起する文は単一の構文ではなく、統語的な特性から見ても、意味解釈から見ても、異なる構文としてとらえるべきだということを主張し、その経験的・理論的根拠を提出している。

本論文の2章では、理論背景となる生成文法および上山(2015)の統語意味論の枠組みを紹介した上で、中国語の文の基本的な文構造の特徴を考察している。3章では、いわゆる“是…的”構文についての先行研究から、いくつか有名な分析を紹介し、それぞれの問題点が示された。その上で、4章と5章において、名詞化辞ではない「的」の特性と位置づけについて、新しい提案が行われた。

本論文で提案される「的」の1つは、アスペクトとしての働きを持つ「的」（以下、「Aspect 的」）である。「Aspect 的」は、目的語の状態を変化させるタイプの動詞の直後にのみあらわれるもので、その動詞に完了の特性を与える。さらに、主語もしくは付加詞を焦点（focus）とし、それ以外の部分を後景（background）とするような意味解釈をもたらす。これに対して、もう1つのタイプの「的」は、「是」によって呈されたQuestion（疑問）に対して、そのAnswer（回答）であることを標示する「的」（以下、「Answer 的」）である。この場合、文の前半が後景（background）で後半が焦点（focus）になるという点で「Aspect 的」とは明らかに異なっている。ほかにも、語順や動詞の選択制限など、様々な体系的な違いがあることが指摘され、それらがどのような統語操作によってもたらされるか、具体的な分析が示された。

このように、本論文では、名詞化辞としての「的」に加えて、新たに「Aspect 的」「Answer 的」を区別することが提案された。従来、“是…的”構文は、とらえどころのない難しい構文であるとみなされることが多かったが、これらの「的」を区別することによって、複雑に見えていた現

象が整理され、よりきめ細かい記述や分析が可能な状態になった。なぜ、ここまで異なる性質を持った語が「的」という同じ文字／音で表現されるのかという謎は残るが、少なくともいったん別の語彙であると認識することによって、中国語の統語的構造について新たな局面が開かれることは間違いない。

よって、本調査委員会は、本博士論文の提出者が、博士（文学）の学位を授与されるに十分であることを認める。